

私は平成二五年四月二三日に鶴鳴を完全撤退してコーチ生活にピリオドを打った。振り返れば五〇年。半世紀にわたるコーチ人生だった。振り出しは大学二年生の時に始めた長崎西高校のコーチだった。長崎西高校には部長の先生が居たが、伝統的に長崎に残った大学生がコーチをすることになっていた。第四代のコーチは二〇回生の酒見氏であったが、酒見氏が長崎大学を卒業した時二年生であった私が五代目のコーチを引き継ぐことになったのだ。

しかし、学生時代ずっと長崎西高校のコーチをしたわけではなく、私がコーチをしたのは大学二年生と三年生の時の二年間だけである。私が四年生になった時に後輩の川村氏が長崎大学に入学してきたので、私はまだ任期が残っていたが一年早く彼にコーチを譲った。

それから私は長崎市内の桜馬場中学校に赴任したが、八年目に桜馬場中学校を全国優勝に導いた。そのことは私の著書「チームを創る」に詳しく述べているが、ここでは「チームを創る」で述べたものの、当時は自分でも気付いていなくて後年気付いたことや、今だから話せる裏話をしたい。

実は、初めての全国優勝にまつわる出来事は、私の中では自分のコーチ歴から抹殺してしまいたいほど恥ずかしい出来事なのである。自慢出来ることは何ひとつない。全国優勝した時の部員はわずか八人で、周囲の人たちからは「たった八人でよくやったねえ」と言われたが、実はわずか八人しか残っていなかったというのが大問題だったのである。話しはさかのぼる。

私が大学を卒業して桜馬場中学校に赴任した時のチームは球技大会レベルだった。着任早々部員たちを前にして私は「俺は日本一のチームを創る」と宣言した。宣言しただけでは絵に描いたモチだ。具体的な対策を立てなければならぬ。選手たちを見渡してみると女子の下級生に一人だけ運動能力の優れた子がいた。そこで私は「ぜひあえずこの選手を中心に女子から強化してみるか」と思った。それ以来女子畑を歩むことになるのだが、その時男の子に優れた選手がいたら私は男子畑を歩むことになったと思う。

女子チームは一年後の夏、長崎市の大会で優勝し、県大会で二位となった。するとバスケット部の人気はグンと高まり、毎年女子部員が増えて、多い時には六〇人になったことがある。しかし、それが全国優勝の前年には三年生が全員辞めて二年生だけ九人しかいない部活動になってしまったのだ。

原因は、選手たちが私の猛練習についていけなかったからだとみんな思っているが、後年私は自身の思いが「俺は日本一の監督になりたい」であって「この子たちを日本一にしてやりたい」ではなかったからこんなことになったのだと気付いた。

自分のエゴを数え上げればキリがないが、この頃の男子部員の扱いはひどいものだった。女子と男子は毎日練習ゲームをさせたが、それは男子を強くしてやるためではなく、男子は女子を強くするための囃ませ犬扱いでしかなかったのである。

そんな扱いをされたにも関わらず当時の男子部員は今でも同窓会に私を呼んでくれる。最初は同窓会に顔を出せば袋だたきにされるのではないかと心配したが、彼等は本当に昔を懐かしんで私を呼んでくれる。そんないい子たちを囃ませ犬扱った罪悪感は今でも拭い去れない。

八人の部員での全国優勝と言ったが、実は全国大会前年までは九人の部員がいた。ところが全国大会直前になって六番手の選手が辞めたのである。全国大会に出られる。上位入賞できそうだ。しかも自分は戦力として起用される。それが分かかっていて全国大会直前に辞める。私はその心理が理解できなかった。

しかし、ずっとあとになって、この子が辞めたのは前述のように、私の思いが「俺は日本一の監督になりたい」であって「この子たちを日本一にしてやりたい」が最優先ではなかったのが原因だったのではないかとと思うようになった。

私は彼女からもっとも効果的なタイミングで仕返しをされたのではないかと思っている。しかし、悪意に満ちた仕返しとは思っていない。おそらく彼女も仕返しをしたという自覚はないだろう。でも、心の奥底に

は 私をちゃんと見てよ」という思いがあったのは間違いないだろうと今でも思っている。

ここまでは人の扱いについて述べたが次は訓練の話をする。

新任の頃の練習はひどいものだった。訓練の名を借りたしごきだった。だから、練習内容はあれこれ工夫したがそれはすべて如何にして選手に苦しい思いをさせるかという考えが基になっていた。選手が歯を食いしばって頑張る姿を見て自己満足し、自分の情熱と厳しさに酔いしれていたのだ。

たった九人に減ってしまったのは選手の根性が足りなかったからだと思い、男子を嘔ませ犬にしている罪悪感もなく、怒鳴り散らしながら全国大会まであと七ヶ月となった正月休み明けの練習で、私はポイントグッターの中村幸子の異変に気付いた。

もともとさちこは痩せてヒョロヒョロしていて体力がない選手だったが、正月休み明けの練習では始まって三〇分も経たないのに練習についてこれなくなるのだ。そこで私は大病院の血液専門の医師に電話をかけた。血液の病気かもしれないと思って彼に電話をかけたのではなく、彼は大学時代の同級生でバスケット仲間だったので、何かアドバイスを貰えるのではないかと思って電話をかけたのである。すると彼は自分が診てやるから連れて来いと言った。診て貰った結果は鉄欠乏性貧血だった。

さちこのモグロビンの値は六・五だった。私はこの時ハンマーで頭を殴られたようなショックを受けた。彼女を一ヶ月以上休ませなければならなくなったからではなく、そんなになるまで気付いてやれなかった自分の傲慢さと無知に對してである。それから私はスポーツ医学を勉強し始めた。さちこは私のその後のコーチ人生に大きな影響を与えてくれた最初の選手になった。

そうして痛い目に遭いながらもその年の九州大会で優勝し、桜馬場中学校は念願の全国大会にコマを進めた。九州大会は八月上旬で、全国大会は八月下旬に行われる。私は九州大会が終わってから全国大会までの約三週間、練習は一日おきにしかやらず、しかも、出来がよくても悪くても一時間半でピタッと止めた。猛暑の中で毎日練習するのは効果がないと思ったからである。

この頃ようやく、私が扱っているのは機械ではない。人間なんだということに気がき始めたのである。練習休みの日にミーティングをしたり、選手に電話をかけたりのは一切しなかった。身体的に休養させるためだけでなく、精神的にも 大嫌いなコーチの声を休みの日にまで聞きたくはない」と思っている選手が必ず居るはずだと思ったからである。実は心配だった。休みの日は何してるのかなあ」と気になった。しかし、ミーティングするのも電話するのも我慢した。

全国大会で優勝したあと、八人の選手や保護者及び関係者からは感謝のことばを貰った。しかし、それまでに私から使い捨てられた選手たちはその一〇倍も居たのである。そのことについては誰からも何も言われはしない。だが、自分の中ではそのことが脳裏に焼き付いているので、初めての全国優勝は私のコーチ歴から消し去りたい出来事なのである。

この懺悔と後悔はその後約四〇年続いた私の道指導理念の根幹を成している。鶴鳴在職中も鶴鳴を辞めてからも、いくつかの専属コーチのオフアールがあったが、私はもう特定のチームには所属しなくて、私のバスケットキャリアが役に立つのならどこにでも出かけて行ってお手伝いしようと思っている。できたらミニバスケットや中学バスケットをメインにお手伝いをしたい。なぜなら、ミニバスと中学バスケットが日本のバスケット界を支える原点だと思うからである。

平成二六年五月十五日 山崎純男の回顧録 完

著者 略歴

昭和十七年〇五月十五日 旧満州大連市にて出生。

昭和四一年〇三月〇二日 長崎大学教育学部保健体育科卒業

昭和四一年〇四月〇一日 長崎市立桜馬場中学校教諭

昭和五二年〇四月〇一日 私立鶴鳴女子高校教諭へ移籍

平成〇九年〇四月〇一日 校名変更により 学校法人鶴鳴学園長崎女子高校となる。
 平成十六年〇三月三十一日 鶴鳴学園長崎女子高校教諭を退職
 平成十六年〇四月〇一日 鶴鳴学園長崎女子短期大学幼児教育学科教授に就任
 平成二五年〇三月三十一日 鶴鳴学園長崎女子短期大学幼児教育学科教授を退官
 平成二五年〇四月二三日 鶴鳴学園長崎女子高等学校バスケットボール部コーチを退任

監督歴 全国大会における成績)

昭和四八年 全国中学選抜優勝大会 優勝 東京 桜馬場中学校) 主将門岡
 昭和五一年 国民体育大会少年女子 第三位 佐賀 鶴鳴女子高校十補強四名) 主将中村
 昭和五一年 国民体育大会少年女子 ベスト八 青森 鶴鳴女子高校十補強名四名) 主将下田
 昭和五三年 全国高校選抜優勝大会 第二位 東京 鶴鳴女子高校) 主将波多江
 昭和五三年 全国高校選抜優勝大会 ベスト八 山形 鶴鳴女子高校) 主将波多江
 昭和五四年 全国高校総合体育大会 ベスト八 滋賀 鶴鳴女子高校) 主将川井
 特发性腎出血でブランク

平成〇二年 全国高校選抜優勝大会 ベスト八 東京 鶴鳴女子高校) 主将田端
 平成〇三年 全国高校総合体育大会 優勝 静岡 鶴鳴女子高校) 主将松山
 平成〇三年 国民体育大会少年女子 第三位 石川 鶴鳴女子高校単独) 主将松山
 平成〇三年 全国高校選抜優勝大会 第四位 東京 鶴鳴女子高校) 主将松山
 平成〇七年 国民体育大会少年女子 第二位 福島 鶴鳴女子高校十補強二名) 主将桜田
 平成〇八年 全国高校総合体育大会 第二位 山梨 鶴鳴女子高校) 主将工藤
 平成〇八年 国民体育大会少年女子 第三位 広島 鶴鳴女子高校十補強二名) 主将工藤
 平成十二年 国民体育大会少年女子 第二位 富山 長崎女子高校十補強四名) 主将高島
 平成十三年 国民体育大会少年女子 第三位 宮城 長崎女子高校十補強一名) 主将重村
 平成十五年 全国高校総合体育大会 第三位 長崎 長崎女子高校) 主将立川
 平成十五年 全国高校選抜優勝大会 第三位 東京 長崎女子高校) 主将立川
 平成十六年 国民体育大会少年女子 第三位 埼玉 長崎女子高校十補強五名) 主将岩永

著書

スポーツとケガ 菱重印刷株式会社) 昭和六一年十二月二五日
 チームを創る 株式会社日本文化出版) 昭和五九年一〇月一〇日
 チームを創る改訂版 今村事務所) 平成〇八年〇四月十五日
 続・チームを創る 株式会社日本文化出版) 平成〇六年〇三月二五日
 大野慎子物語 有限会社出島文庫) 平成十二年〇四月〇七日
 山崎純男の回顧録 出版せず、インターネット閲覧のみ) 平成二五年〇四月三〇日

役職

日本体育協会指定ジュニア強化コーチ 昭和五七年～昭和六二年
 日本バスケットボール協会ジュニア強化コーチ 昭和六三年～昭和六四年
 長崎県バスケットボール協会競技力向上委員長 昭和五二年～平成〇四年
 長崎県体育協会スポーツ医・科学委員 平成〇二年～平成二二年
 長崎県競技力対策本部育成強化推進委員 平成〇八年～平成二六年
 長崎県バスケットボール協会理事長 平成十八年～平成二一年
 長崎県バスケットボール協会副会長 平成二二年～平成二三年
 第二四回FIBASIA女子選手権大会運営本部長 平成二三年八月 於大村市)